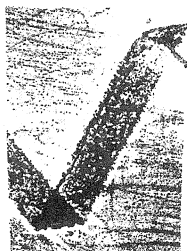


# 文化庁月報



1984-10

No.193

## 【表紙】

皮はぎ用具

モジリ

解説は23ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

## もくじ

芸術祭に期待する

内村直也 4

### ●—(随想)—●

今日出海氏と「芸術祭」草創期

桑原経重 8

### ●—(報告)—●

昭和60年度以降の

芸術祭のあり方について 文化庁芸術課 10

空前の規模・多大の成果

第八回全国高等学校総合文化祭

岐阜県教育委員会 13

我が県の文化行政

21世紀への文化開港に向けて

—横浜市の文化行政— 高橋敏美 17

### 文化庁ニュース

皇太子同妃両殿下奈良国立文化財研究所行啓 20

第8回日本民謡まつり

—日中友好ムードのうちに閉幕— 21

第31回日本伝統工芸展が開催される 22

昭和59年度都道府県宗教法人事務担当職員研

修会開催さる 23

昭和59年度文化財建造物修理主任技術者講習

会(普通コース・前期) 23

### ●—(展覧会)—●

現代美術への視点

—メタファーとシンボル— 24

昭和59年度特別展

芸術としての写真・その誕生から今日まで

—シカゴ美術館のコレクションから— 25

地域文化活動紹介シリーズ⑪ 兵庫県西脇市 28

国宝鑑賞シリーズ⑪⑫ 国立劇場ニュース 31

## 芸術祭に期待する



内村直也  
(劇作家)

芸術の起源は祭りにあり……祭典にある。

古代オリエント文明は、クレタ島を経て、ギリシャに上陸し、地中海文明の華を咲かせた。紀元前五世紀である。ギリシャがポリス(都市国家)から、民主制の確立へ移行した時代である。ソクラテス、プラトン、アリストテレスと三人の大哲人が出現したが、同時に、アイスキュロス、ソポクレス、エウリピデス、アリストパネスの四人の劇作家が生まれる。

彼ら、劇作家は、悲劇と喜劇を創造した人たちである。アクロポリスの丘の南側の斜面にあるディオニソス広場の祭典のために、ドラマを創った。ここへは二万人の人達が集まったといわれる。

春の祭典では、伝説、神話等が扱われる悲劇を、冬の祭典では、日常生活・社会批判を扱う喜劇が上演された。ギリシャ劇は、合唱隊がドラマを進行させていく。ドラマも音楽も舞踊も、祭りの一つの行事であった。実演芸術の起源はここにある。

日本の芸術祭が、昭和六十年以降の改革に、コンクール性よりも、フェスティバル性を強調したことは当然でもあり、また英断でもあったと思う。

回公演を従来より多くすることが、今回の改革にはうたわれていない。そして、専門家だけでなく、アマチュアも参加できる……、これでこそ本当の芸術祭といえる。コンクール性が強くなると、アマチュアの入りこむ余地がなくなってしまうからだ。専門の人も結構だが、アマチュアの中から、新しい芸術家が生まれてこなければ、芸術というものは盛んにならない。

この八月に、岐阜県の瑞浪市へ講演に行った。四万人の人口の町である。そこに立派な文化会館が新築されていた。

「こんな立派なものを建てる予算が、町にはあったのかねえ」とタクシーの運転手は言っていたが、日本全国どの町も文化会館を建て、あるいは建てようとしている。それだけ、文化というものに魅力を感じるのだろう。文化会館は、その町の「顔」となった。

この町は、焼き物の産地である。各地町村にそれぞれの特産品があるということは、日本文化の伝統的な特色であり、おもしろい点である。これは、徳川政治が、各藩の交流を許さず、独自の産物を要求したことから、こういう特産物が生まれたのであろう。

アメリカには、その町の特産品はない。だから、アメリカで土産を買おうと思っても、西も東も全く同じである。日本では、ちょっと離れた町に行くと、その駅の売店で売っているものがまるで違っている。土産を買うのには大変便利である。

この文化会館には、千五百人くらい入るホールがある。猿之助一座がここで芝居を観せて、大好評であったという。この大ホールも、芸術祭の巡回公演を待っていた。私の講演にも三百人くらいの聴衆が来てくれて、私の話をよく聞き、よく笑ってくれた。

文化会館にも感心したが、山に入ったところに、歌舞伎小屋

創始以来四十年も経つと、どうしてもマンネリズム化してくる。コンクールが重視されるようになると、部門ばかり細分化して、総合的な芸術という視点がぼやけてくる。いまの芸術祭に思想がないという批判は、こういうところからもきている。思いきって、なんとかしなければならぬところにきているのである。その思いきりを、今回の芸術祭改革は断行したといえる。

芸術祭を、実演芸術を中心とした「芸術の祭典」としたことによって、その思想も明確なものとなった。新聞紙上などでは、これを誤解して、「媒体芸術」は芸術祭からはずれるという言葉を使ったが、この表現は間違っている。はずれるのではなくて、別の扱いをするという意味だが、これについては後に述べたい。祭りである以上、東京や大阪等の中心都市だけでやっていてはいけぬ。全国的なものに盛りあげていくことが理想である。芸術祭の期間は、日本全国が、芸術の祭りを楽しむということになりたい。

そのために、地方に既に行われている芸術祭を、なるべくこの期間に移行して、集中させること。そして、移動芸術祭の巡

があるのには驚かされた。両花道もあり、廻り舞台もある。舞台正前から水中に飛び込む仕掛けもある。楽屋も見せて貰ったが、歌舞伎の衣裳・カツラがたくさん、しかもよく整理されて置いてあった。この土地の歌舞伎好きの人の道楽だという。年に何回かこの山の中で、アマチュアの歌舞伎好きを集めて芝居をや、町の人達に楽しんで貰っている。大変な道楽だと思った。こういうアマチュア歌舞伎の中から、新しい玉三郎や孝夫が生み出されるのではないかと思った。下町の玉三郎だって、これと同じようなことをやってきたのだろう。この町ならば、歌舞伎だけでなく、新しい芝居でも音楽でも舞踊でも大歓迎される。私は講演をしていて、反応でそれが分かった。

今回の改革では「芸術祭の海外紹介を推進するため、芸術祭の内容を紹介する外国語版冊子を作成して、積極的に海外PRを図る」となっている。従来の芸術祭では、これが行われていなかった。

この小冊子は、海外向PRだから、記録の必要はない。芸術祭に登場した優れたプログラムを、魅力的に表現し、海外の識者にこういうものを輸入したいという気持ちにさせなければいけない。そのためには、写真を豊富にし、できれば、海外でも知名度のある評論家、作家のコメントをつけた。これによって、読む人の先入観ができる。筋がき、キャストだけではなく、PRにならない。

この小冊子を世界各国の団体、識者に配布すれば、日本の芸術が分かるだけでなく、自分の国に招へいしくなる、……そういうものでありたい。

日本もそうだが、どの国でも自分の国にない、古い、あるいは新しい、芸術を渴望している。この欲望をみたすような表現であって、それは単なるPRではなくて、文学的にも魅力あ

る表現が望ましい。

日本はいまや経済大国となり、工業的には大きな輸出国である。それは非常に結構なことだが、文化面での対外関係をみると、逆に大きな輸入超過国である。

アメリカとの関係を調べると、文化面では輸入四〇に対し、輸出一という数字が出てくる。即ち、演劇でも、映画でも、テレビ番組でも、輸出がきかない。圧倒的に輸入過多である。書籍なども、アメリカの新刊書は次々と翻訳されて、日本で出版されるが、日本の本は……翻訳者が少ないせいもあるが、英語になって出版されることは非常に少ない。

アメリカは、日本からの自動車その他工業製品の輸出が多すぎるといふ。その代わりに、牛肉やオレンジを買えといふて強要する。アメリカの牛肉は、かたい。松阪や神戸の牛のほうが遙かにうまい。

工業分野の金額は、文化分野の金額と比較して段違いである。文化面は金額がかさまないからといって、四〇対一で黙っている手はない。工業分野以上に、日本は文化、芸術面では伝統的な、あるいは新しいものを持ち、創り出している。

従来は、海外に向けてこういう宣伝をしなかった。あるいは売りがたが積極的でなかったともいえる。この役割を芸術祭の小冊子が果たすものとなることを期待する。

この七月、ニューヨークで、野村万作さん一座の狂言を見た。最初リンカーン・センターの野外劇場でかり火の照明で演じた。数千人の観客が入ったという。私は、ジャパン・ハウスの講堂で観たのだが、ここも満席に近く、アメリカ人の観客がよく笑ってくれた。「二人袴」などという演目は、はかまというものがかかるかと心配したが、アメリカ人はこれをスカートと見たようだ。

を抱いて、ワシントンの会議に出席した。ところが、三日の会議中、三大ネットワークはとも出席しない。これには驚いた。日本と番組交換などやっても仕様がないうえなのか。政府のやる行事にソッポを向いているのか、その理由は分からない。出席したのは、地方局の社長連だけで、ネットワークの実権を持っていない。会議では、話す相手がいなかったで、帰途、ニューヨークによって、少し当たってみた。そして全然見込みのないことが分かった。

従来NHKでも、三大ネットワークと交渉したが、先方は、日本の番組ではアニメーションだけで、他の番組は見向きもしないという。その理由は、視聴率だけが問題で、どんなにいい番組を放送しても、視聴率があがらなければ、編成局長はクビになってしまう、という。

今回は時間がなかったで、そのままに発ってしまったが、これではいけないと思った。アメリカ人に日本をPRするためには、なんといつても、三大ネットワークを利用することが一番手つとり早く、賢明である。日本紹介だけでなく、日本の優れた番組をアメリカ人に知らせることも大切だ。芸術祭で受賞した番組などは、アメリカはネットワークにのせる義務があると思ふ。日本がアメリカと仲良くしていく以上、このくらいのことはしてもいい。アメリカの牛肉だって買わされて、のだから、芸術祭受賞作品がたとえ視聴率があがなくても、放送に乗せるだけの好意くらいを示してもいいではないか。今回は鼻もひっかけられなかったが、機会あるごとにこの実現の糸口を捜そうと思っている。

最後に一つ、新しいアイディアを出したい。これが芸術祭に該当するかどうか、まだ少々確信のない私案だが、それは日本語をよくし、魅力あるものとするために、この芸術祭を活用す

閉幕後楽屋に顔を出したが、一座の人達も非常に満足していた。アメリカには全然ない、古典喜劇として、彼らはこれを高く評価しようである。

次は、媒体芸術……特にテレビだが、従来芸術祭には参加も多く、最大の年中行事として各局が、コンクールに積極的であった。しかしどうも芸術祭の時だけにいい作品を創るという傾向が強くなったようである。

テレビは日本中の人達が毎日視聴しているのだから、日常番組をよくしていくことが大切である。期間を限定したコンクールは、テレビの発展になじまない。ということから今回の改革で、これを年間賞として考えることになった。

日本ほど、テレビが大衆によく視聴されている国はない。但し、視聴率だけを問題にしてはいけない。優秀でない番組が、視聴率だけは高い。視聴率もあがり、しかも優れた番組が、テレビの理想である。そういう番組を日常的に放送して貰いたい。つまり普段着番組のレベルを向上させるために、これを年間賞としたのである。この年間賞の審査方法等については、特別の小委員会を設けて検討中である。地方の局は、ドラマは創らず、ドキュメンタリーが多い。このドキュメンタリーは重視したいものだ。

この七月、私がアメリカに行ったのは、外務省の「カルコン」(日米文化教育会議)に出席するためであった。今年の「カルコン」では、テレビ交流が大きなテーマの一つになっていた。日本からも、NHKだけでなく、民放の社長級の人達が九人出席した。アメリカ側も当然三大ネットワークが出席するものと思っていた。

私は、文化庁にたのまれたわけではないが芸術祭で受賞した作品を、この三大ネットワークのどこかに乗せたいという希望

ることである。

世界の情勢を考えると、文化、経済の強い国のことが世界中に流れていく。本家のイギリス英語よりも、アメリカ英語が世界にひろまったのは、そのいい例であろう。日本語も、経済だけでなく、文化が多く輸出されるようになれば、世界的に通用することとなる。

芸術祭には、朗読という分野も、参加している。これは、書かれた文章をいかにうまく読むかという芸術だが、この朗読の範囲をひろめて、個人のスピーチや、会話という形式も加える。独り語りに英語という芸能が入っているが、ここで私が主張したいのは、日常生活の日本語である。

正しい日本語というよりも、いい日本語、魅力ある日本語である。共通語だけでなく、方言が入ってもいい。

たとえば、アナウンサーの喋りは上手だが、日常生活の日本語にはなっていない。一つの型ができてしまっている。また、日本人の夫婦は、会話が非常に少ない。もっと日常の会話を楽しむ夫婦であつてもらいたい。あるいは、学校で、生徒がスピーチをするという時間が、これも非常に少ない。そういう時間のない学校もある。

こういう、もろもろの理由から、日常生活の日本語の問題を取扱ってみたい。この分野には専門家というものはない。みんなアマチュアである。年一回のフェスティバルに国が、日本語のために、こういう試みをするのも面白いのではないか。

フランスのアカデミー・フランセーズは、フランス語の浄化が会員の使命になっている。これに該当する日本の芸術院には、そういう義務を負わせてはいない。日常生活の日本語を芸術祭で扱っても、ちつともおかしくない。具体的にどのような形式でやるかは、今後の研究課題である。

# 今日出海氏と「芸術祭」草創期



桑 原 経 重

(東京学芸大学名誉教授  
昭和音楽大学教授)

敗戦のあくる年、昭和二十一年の春から初夏へ移る季節だったろう。今日出海芸術課長は、当時まだ文部省社会教育局のなかにあつた芸術課員の私たちを集め、さりげない口調で「芸術祭」の話を切り出した。最初から課員全員を集めたかどうか、もう来年で四十年目を迎える歳月が経っているので、はっきり覚えていない。どうも、一番はじめは、数人の者に語りかけたような気がする。課長補佐の笹岡太郎氏、美術関係担当で、間もなく課長補佐を継いだ摩寿意善郎氏、音楽関係の吉田秀和氏、演劇関係の筆者とそのほか二、三人を相手に話しかけたように記憶している。それも、課長室に呼び集めて、新しい構想をじゅんじゅんと説くような形ではなかったとおもう。いまでも、脳裡にまざまざと浮かぶのは、その前後に、今さんが例のごとく課長室から出て来て、課員に話しかけながら、

「ぼくはお祭り男なんでねえ。」と、ほがらかに笑っていた姿である。

窓の外景は、いま国立教育会館の建っているところで、まだ、あたり一帯、無残な焼け跡であつた。食糧難もひどいもので、あの当時の定年制がどうなっていたか知らないが、かなりの年輩者がいて、毎日出勤するより家で床に就き休養する日を時折えられるかと、きわめて具体的なプランを練りひろげるのである。そう言えば、しばしば課員と談笑している最中、芋を食い夜ふかしして構想に没頭したはなしは、一度も耳にしたことはない。いつも、なんとなく雑談しているうちに、芸術祭でこれから、われわれは何をするか、きみには何をして欲しいかが話題の中心になつた。

「芸術祭興行」を一月半にわたって引き受けた東宝側との打ち合わせがあつて、今課長のお供で、担当係の末席につらなる私も何度か出席したことがある。あちら側からは、当時の東宝重役、森 岩雄氏、滝村和男氏が毎回あらわれた。両氏とも今さんとごく親しい間柄だったので、なごやかな話し合いだった。芸術祭に全面的に協力して下さる方向で、催しごとの大枠はかたまってきた。旧帝国劇場を会場にする件も決まった。しかし「芸術祭興行」と銘打って、相手のほうは「興行」をするのである。つまり、商売をするわけである。演目の部門分け、とりあげる題名、出演者の人選など細かい詰め段階に入ると、意見を異にする場合があつた。芸術祭執行委員会の企画プランに、再度、ご一考を願いたいと言つたのである。そんな時、相手側の重役のひとりはおだやかな口調で話し続けながら、押すべき点を押してくる。そして、こちら側に同意を求めるように、それでございましょう？ と、今さんをながめ、その眼をそのまま若輩の私のほうへ移す。全く鋭い、厳しい眼光であつた。今さんは一向に平然と振舞つていた。親しい友達同志の言葉になつて、なにか、冗談を飛ばしたりした。おそらくこの息で、はじめは消極的であつた松竹側の重役たちに接し、芸術祭「参加」興行の看板を掲げさせたのであろう。

当時、はなはだ高かつた入場税を免税にしてもらう交渉は、池田勇人主税局長を相手に再三、再四、粘り抜いた。細部末端のところから衝こうとする場合には、課員の中でも大蔵省向き

とつておかまいと身体がもたないと、真面目な顔で呟き、隣の席の、その人より多少年下のひとが大いに頷いている。周囲の者も眉をひそめるどころか、急に疲労感をおぼえる。そんな雰囲気の時代であつた。

『芸術祭十五年史』(昭和三十五年、芸術課編)には、今さんも「芋を食いながら、夜更けるまでこの構想に没頭した」と記している。

ところで、この箇所を読んで記憶をたどつてみると、当時の今さんはそれらしい気振りのみせず、たつたいま、課長室で頭にひらめいた感じで芸術祭の話をはじめた。

聴かされた者たちは一瞬、呆然とした。こういうご時勢に予算なしで大仕事をするという構想なのである。しかし、今日出海課長は自信にみちた笑顔で話し続けて行く。いつの間にやら皆はその自信に引つ張り込まれた。敗戦直後、これからは「文化国家」だという掛け声が喧しかったが、このとき、今さんは「文化国家」などという言葉はもちろん、「文化」とか「芸術」とか、そういう言葉もあり、口にしなければならなかった。予算関係で、文部省主催とはいかないので、執行委員会の主催にしたらどうか、芸術祭興行の形でどこかの会社に参画してもらう方法が考

の人物にあたられた。たしか高松宮に關係のある団体の縁で、この件が不可能になつてしまつたまで、団体の人にも協力してもらつた。人材の活用という点では、いつもその仕事に向くひとを選んだ。課の内外を問わなかった。例えば、伝統芸術部門の制作、その他、興行会社との連絡にはその方面にあかるい池谷作太郎氏の協力を求めた。同氏は当時、憲法普及会という団体にいた。今さん自身、さきに挙げた「十五年史」にも「細かいことは久保田万太郎先生の指示を受けた。邦楽については安藤鶴夫氏がよく教えてくれた」と顧みている。

流れ、動きに即して、すばやく反応するので、昨日聞いた話が今日は全然かわつていて戸惑ふこともあつたが、あとで今さんの考えを知ると、なるほどと頷ける。

十一月のなかば、東宝のゼネストで、帝劇の「芸術祭興行」は、一週間ほど早く打ち切られた。今さんは、わが為すべきことは終つたという顔つきだった。もう、つぎの仕事のプランを練つていた。

今日出海氏がその後、初代の文化庁長官に就任したこと、さらに続く経歴のかずかずは、去る七月末のご逝去で新聞、テレビに報道された通りである。そして、今さんのようなお役人は二度とふたたび現われぬであらうという声も、まだ、人びとの耳に残つているとおもう。敗戦直後の、あの混沌たる時代だったからこそ、今日出海芸術課長が出現し「芸術祭」を企て、実行し得たのかも知れない。芸術祭はとつきの昔に文化庁開催へと発展し運営形態も大きく様変わりした。この年中行事の続くかぎり、今さんが生前よく軽妙な語りぐちで言つていたことば——なんとなく愛着の念がこもつていふようなことばが、空のどこからきこえてくるような気がする。

「芸術祭はまだやっているのかい……」

## 告 報

### 昭和六十年以降の

#### 芸術祭のあり方について

(芸術祭懇談会報告)

#### 芸術祭の経緯

芸術祭の生みの親ともいうべき今日出海氏が、去る七月三十日亡くなられた。時あたかも、来年は芸術祭四十周年の記念の年を迎えようとする、その目前のことである。

昭和二十一年の秋、まだ世の中が戦後の混乱を脱しきっていない時期に、芸術祭はその産声をあげた。…惨澹たる焼跡の町にあって、様々な災難が我々を圍繞して居ります。然し伝統に養はれた文化的能力のみはなほ衰へずして様々な艱難の中に息づいてゐます。このような芸術文化を一堂に集めて鑑賞し、再認識し、再検討することは、戦後漸く祖国建設に立ち上った国民に必要且有意義なことと

重ねつつ事業の充実を図ってきた。しかし、長い時の流れのなかで、次第に間口が広がり総花的となり、その結果芸術祭の性格そのものがあいまいとなってきたことはいなめない。また運営のマンネリズム化が指摘されるなど、あらためてそのあり方が問われるようになってきた。

そこで、文化庁では昭和五十八年六月に昭和六十年以降の芸術祭のあり方について検討するため、芸術祭懇談会（内村直也座長、同実行芸術小委員会（倉橋健委員長）及び媒体芸術小委員会（登川直樹委員長）を設けた。芸術祭懇談会及び小委員会では、昨年七月から本年五月までの間延べ十三回の会合を重ね、ようやく次のような結論を得、本年六月に開催された芸術祭執行委員会総会に報告した。

#### 報告の内容

報告ではまず、我が国芸術活動の現状分析がなされ、最近①芸術文化に対する国民の欲求の増大と相まってその活動は一層活発化し、また、新たな芸術分野の開拓が進むなど多様化の傾向が一段と強くなったこと、②各地域における芸術文化活動も各分野にわたってその水準は向上し、地域住民の芸術鑑賞の機会も飛躍的に増加しつつあること、③国際化が急速に進展する中にあること、我が国の芸術文化の役割について国際的な視野から見直す

思ひます。古き文化を保存し、新しき文化を

昂揚する芸術祭の催しは国民を鼓舞し明日の建設のための力を養ふに足りる企てだと信じます。過去現在の文化の総決算とでもいふべき芸術祭は明日の文化創造の礎でなければなりません。…と、声高らかにうたった芸術祭事始めの趣旨は、当時の関係者の意気込みと意とするところをよく伝えている。

#### 芸術祭の見直し

それから約四十年。時代の流れに対応しながら、芸術祭は、戦後日本芸術史のうえに大きな足跡を残してきた。

昭和五十七年、それまで長く芸術祭執行委員会委員長をつとめてこられた高橋誠一郎氏



芸術祭執行委員会委員長（五十一年六月十五日）で挨拶する  
鈴木勲文化庁長官と内村直也芸術祭懇談会座長（右席）

必要に迫られていることの三点が指摘された。又、これからの芸術祭は、これらの点を踏まえて、我が国芸術文化の創造と進展に寄与する「芸術の祭典」としての性格を明確化することが必要である、とされた。そして新たな

#### 文化庁芸術課

が亡くなり、その跡を今日出海氏が受け継がれた。実に三十六年ぶりに、生み落した子芸術祭と再会された訳である。その後今日に至るまで、今委員長のもとで、芸術祭は毎年実施されてきた。

そして、今日出海氏亡きあとの昭和六十年、芸術祭は四十周年を迎えるひとつの時代が終り、また新しい時代に入る交差点であり、芸術祭の歴史にとっては、大きな折目節目ともいえる。

芸術祭の歴史は、振り返ってみると、平坦な道りではなかった。時代の推移、社会の変容、芸術界の動向等々大きな潮流に揺り動かされながら、芸術祭は、部門の増設、その細分化、規程の一部改正など、折々の改善を

対応策として概ね次のとおりの提案がなされた。

#### (1) 芸術祭の基本的な考え方

芸術祭は、演劇、音楽、舞踊、演芸の実演芸術、つまり舞台芸術を中心とする「芸術の祭典」であることを明確にすることによってコンクリートの性格よりは「お祭り」としてのフェスティバル性を強調する。

#### (2) 地域の芸術文化活動の重視

地域の芸術文化を振興するとの観点から、芸術祭公演の一部を東京・大阪以外の地でも開催し、移動芸術祭との連動強化を図りあるいは地域の芸術家（アマチュアを含む）の積極的な起用を考慮するなどして、芸術祭を全国的な行事とする。また芸術祭と、都道府県単位で実施している芸術祭等との連携強化を積極的に推進し将来においては芸術祭事業の一部を都道府県が持廻りで開催する可能性を検討する。

#### (3) 国際化への対応

急激に進展する国際化に対応し、民間芸術団体や、関係各機関とタイアップするなどして海外の優れた芸術家（団体）の公演を積極的に取り上げる。その際特に欧米以外の地域の芸術にもよく配慮する。また、芸術祭の内容を紹介する外国語版冊子を作成し、海外広報を積極的に図る。

#### (4) 期間の短縮

芸術祭の期間は十月一日から十一月十日ま

でとし、従来より五日間短縮することで集中的な盛り上げを図る。また十月一日には芸術祭開幕の祝典行事を行い、文化の日（十一月三日）を中心とする「教育・文化週間」に主催公演を集中的に開催する。一方、参加公演は、十月二日から三十一日の三十日間とする。

(5) プロデューサーシステムの考え方の導入  
主催公演の企画制作は、従来芸術祭執行委員会の企画委員会を中心に行われてきたが、さらに意欲的な公演を計画するため、個性的・独創的な芸術家等を中心にプロジェクトチームを編成し、主催公演の企画制作を行わせる。

(6) 参加公演とその顕彰

参加公演は演劇、音楽、舞踊、演芸の実演芸術すなわち「生の芸術」の四部門とする。

授賞については、現行の芸術祭大賞、同優秀賞に代り、「芸術祭賞」（仮称）一本とする。

また、受賞者（作品）については、特に移動芸術祭等に取り上げて、その全国的な普及を図る。

(7) 媒体芸術年間賞の新規設定

媒体芸術（映画、放送、レコード）については、この分野の活動状況が日常的な性格の強い一面をもっていることなどに配慮し、年間を通しての作品を対象とする「年間賞」の設定を早急に検討する。年間賞については、この報告を受けて文化庁が設置した媒体芸術

和六十年度からの実施については、すでに結論を得ており、近々その実施要項が発表されることになっている。

なお、媒体芸術については例えば映画鑑賞会等催物形式で開催できるものは、主催事業の種目として実施し、また、適切なものについては芸術祭協賛公演（作品）として委嘱する。

(8) 広報活動の強化

芸術祭の広報活動を強化し、その一環として「芸術祭シンボル・マーク」を制定するなど芸術祭公演の周知方を積極的に図る。

今後のこと

文化庁では、これらの意見を踏まえ、新しい芸術祭開催要綱を策定し、今年末までに発表することとなっている。

昭和二十一年の第一回芸術祭には、旧帝国劇場、東京劇場を会場として、舞楽・能楽・人形浄瑠璃・歌舞伎・新劇・オペラ・バレエ・和洋の音楽・舞踊などさまざまな舞台芸術が上演され、それを機に、まるで長い眠りから目覚めたかのように、日本の舞台芸術は一時に開花した。「古き文化を保存し、新しき文化を昂揚する」催しであり「明日の文化創造の礎」であった。

ここまでの事業の発展を支えてきた多くの人びとの努力を考えると、昭和六十年に芸術祭四十周年を迎えるに当って今いちどその原点に立ち戻り、芸術祭を我が国の芸術水準向上の中核とすることが、今日の関係者に課せられた責務であろう。この意味で、このたびの芸術祭懇談会のまとめた抜本的改善の具体的な指摘は、まことに大きな意義を持つものといえよう。



国立劇場ニュース

■歌舞伎公演（大劇場）

昭和五十九年度芸術祭協賛  
国立劇場新作歌舞伎脚本入選作  
声川照葉作

野口達二補綴・演出

北洲霊異

文耕堂ほか作

■ひらかな盛衰記

11月3日（土）～25日（日）

十一月歌舞伎公演は久しぶりの新作の登場。昭和五十三年以来国立劇場では新作歌舞伎脚本を募集しているが、五十八年までに十六本の佳作入選作をだしている。その中から五十七年度の佳作入選作声川照葉氏（写真）の「北洲霊異記」を舞台に乗せることに決定した。補綴・演出は野口達二氏。新人の作品を上演する初めての公演となる。歌舞伎に新しい作品を、そして活力ある舞台をめざしての新人登用で、声川氏もすでに何度かの書き直しを行い



声川照葉

「北洲霊異」と題名も替った。又五郎、幸四郎という若手コンビに、又五郎、幸四郎、権十郎、田之助といったベテランを配している。

物語の世界は、河東節浄瑠璃の流祖十寸見蘭洲こと蔓蔦屋庄次郎の謎に満ちた生涯に推理の目を向けている。半太夫師の名手で筆が立ち、俳諧を能くし、また儒学者としても相当なものだったという蘭洲が、忽然と姿を消した陰には、傾城閑屋の霊がからんでいたというのがテーマになっている。学問と芸道そして娼家の主としての生活といった色々な面を持った複雑な性格を一気にくつがえした閑屋の妖気。歌舞伎の手法を駆使して繰りひろげられる一大絵巻にご注目いただきたい。歌舞伎の曲り角がまたぞろとりざたされているが、新しい作品の出現があまりに少ないこともその原因の一つとされている。これを機会に応募作品も増え、同時に質の向上にもつながることを切望している。

いま一本は「ひらかな盛衰記」の「大津宿屋、笹引き、松右衛門内、逆櫓の松」という半通し。松右衛門の幸四郎は初役で、お筆の菊五郎も「笹引き」は初めてである。各々父親の当り役を継承するわけで、力量、魅力ともに充実した両優にとっては、いまきつちりと手に入れておかなければならない役での競演である。俳優にとって、ある年齢でマスターしておかなくてはならない役というものがある。早すぎても遅すぎてもいけない。それが時分とい

うもので、出会ったその機会をのがすことなく一つ一つ丁寧にものにしていこう努力こそ大切なのである。今回などもまさにその一つであろうと思う。必ずや立派な成果をあげてくれるだろうし、盛りあがった舞台が期待できよう。機は熟し、相手もよし、そんな舞台が悪かろうはずはない。古典の名作と新人作家の意欲作。二本の作品にかける秋の国立劇場にいま熱い視線がそがれている。

●その他の公演（11月）

■声明公演（小劇場）

桐尾羅呼欠 15日／16日 6時半

■民俗芸能公演（演芸場）

説経の芸能 22日・6時

■演芸（演芸場）

上 席 1日／10日・1時半

中 席 （土曜日のみ1時半・5時）

11日／20日・1時半

花形新人演芸会 21日・1時半

現代落語6人の会 23日・1時半

国立名人会 24日・1時半

■能 楽（千駄谷 能楽堂）

定例公演

(例)清水座頭・山姥 7日・1時半

(例)金藤左衛門・声刈 16日・6時半

普及公演

(例)合柿・求塚 10日・1時半

狂言の会

苞山伏・武悪・六地藏

30日・6時半

編集後記

○今年も芸術祭の季節がやって来ました。発足以来三十九回も続き、手前みそになりますが、我が国の文化史の上でも大きな意味があると思います。

○戦前ではいわばおさらい会に過ぎなかった浄瑠璃や浄曲の演奏会が、今では、水準、観客のマナーなどの点で洋楽のコンサートに遜色がなくなったのも、邦楽が芸術祭のプログラムに盛んに取り上げられた結果だと言われます。芸術祭は、伝統芸能の継承だけでなく、オペラやミュージカルの意欲的な作品創造の場ともなっています。

○この事業の生みの親である、今は亡き今日出海先生の御冥福を祈ります。(H)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課  
TEL(03)三六八二二四一(代表)

「文化庁月報」十月号

(通巻第一九三号)  
昭和59年10月25日印刷・発行

編集 文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号  
発行所 株式会社 ぎょうせい  
本社 千代田区中央区東区7丁目4番12号  
営業所 千代田区新富町52番地  
電話(03)二六八二二四一(代表)  
印刷所 (株)行政学会印刷所  
原稿口添 東京 九一六二番

年間購読料 二、一六〇円(送料共)  
定価 一八〇円(送料四五円)